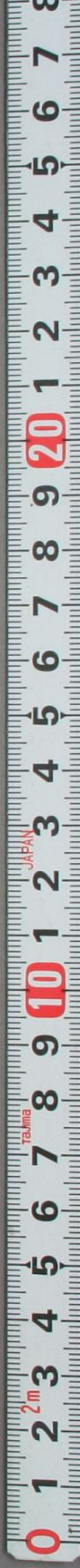


斐魚壹日載

四十四

大正四年十月廿四日起書

特別
14
1919
293



変魚壹日載

大正四年十月二十四日起筆

○余の花糸の内は柏の
 葉を一つもきき念ひし
 号柏と名をせり体は仿
 らぬ漆器の葉子入
 表ととも柏の葉を
 をすし
 甲大形し新柄を
 の形を改めし
 陰うも此の柏の葉の
 の説

葉盤、葉椀、古は神饌又は食物を盛るに、柏の葉を用いたるものにて、古記にも柏何枚とあり、神武天皇紀に所謂葉盤も、八枚を作りて盛飯を、八咫鳥に備へし由なり、ヒラテといふは、其形の上よりいふものにて、平なる意なり、クボテもヒラテと均しく、くぼかなる意にて、手とは何の手、彼の手といふ如く、器の形を稱する古俗なり、故に檜の葉を以て造りたる器の、窪かなるをクボテといひ、平かなるをヒラテといふ、しかるに兼葭堂雜録の檜の御膳の條に、檜葉にて宮の如くに折て、細き竹にて縫製すとしるし、長サ凡二寸、深七寸、横一寸六分の寸法を示せる圖を掲げたり、しかるに白河家に行はるる鎮魂祭中寅日にも、檜葉を八枚圓く重て、細き竹にて編つけ、盆の如くに製し、中に飯を盛て神に供す、是をひらでの

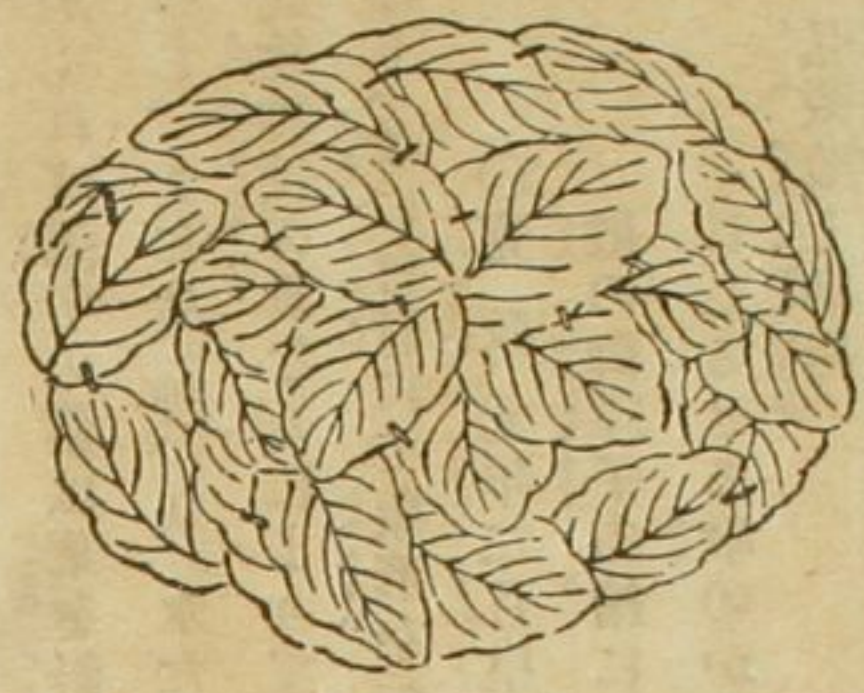




御供と稱す、其製小異ありといへども、櫛の御食に同じ、
 是なん上古より葉椀、葉手といへる器なるべしとあり、
 是にてクボデ、ヒラデの形状は、大略知らるべきなり。
 櫛齊雜考に、眞本新撰字鏡卷七一、列本草部五十九 藩 又保天
 久 天臺六十卷音義卷一 水部 瀕テ 字鏡集卷二 水部 瀕テ
 れらの瀕、瀕は、もとより漢籍にはなき文字にて、皇國

葉椀 四寸五分
 米ノ御飯粟ノ御飯此にもるなり

大小の窪手平手を撤したるとき
 かくの如し



口傳云青竹の皮目を細くはりて針にして此形に作るなり青柏は葉や
 はらかにして作りよし十一月比の枯葉は葉強くして作りがたし枯葉
 の時は湯をぬるくしてしばらく漬おきて作べし

饗之、とある原注に、葉盤此居 葉椀 覆以 笠形葉盤
 似 笠形とあるものにて、木葉を刺合せて作れる物なり、
 葉盤
 大小窪手の口に準すべし、葉椀の
 蓋なり、平手の宮に在る六十四
 葉の料の平手の作りやうは、蓋の
 平手とおなじ、眞享の時八枚にて
 作るべきよし、兼連朝臣宗恒朝臣
 へ仰出さる

葉椀 三寸五分
 四方也
 干物生物御菓子等此くほてに
 もる也



右元文大嘗會神饌調度圖にのするところの圖なり
 神樂歌神に也比良天乎天耳止利毛知天云々、愚案抄に云、
 八ひらては八枚の平盤也、柏の葉にてさして神供をもる
 物也、また新勅撰集に、
 霜枯や檜の廣葉をやひらてに
 さすとぞいそぐ神のみやつこ

相模集に

〇清大親の漸く此の...
 煩り、河内を授け侍の件也...
 門外漢も...
 家も...
 此物も...
 兄と...
 三光室...
 この...
 くる...

大令の授意すことと假令の柱め代を發行批
りあるもの世にあらざるは論ずるにあらん伯淵
に取つて決して得業と謂ふに三井も存に就て
世より論じ無きものも曰う儀に言ふ事ある人の由
に大令を入ることあるも目まじりおしりか
せあるものもあらんが更なる四五人乃至十人を増加
し其のうちにあらざるも加ふることにさしはれず
あつたは其の類なる用授意の思惟に添ふもの
りあるものも此の類なるものもあらんが更なる
あつたは古河の安中も株打るものも加ふる方後伯
の味方を危しめるものも又大令にむかひて物倫を
あつたは其の類なるものも加ふることにさしはれず



當物の初案より見るも今現に大令記念の事業の
めり得業より見るにそのものもあらんが更なる
芽を味方とすものもあらんが更なるものも
内案の改案より見るも大令の方此の類なる柱
得業より見るにそのものもあらんが更なるものも
つて見るに前初案の思惟を添ふものもあらんが更なる
と文おの世の思惟を添ふものもあらんが更なる
例より大令を降つた後きやと云ふに其の思惟は文
おの方を降つた後きやと云ふに其の思惟は文
と文おの世の思惟を添ふものもあらんが更なる
と文おの世の思惟を添ふものもあらんが更なる
と文おの世の思惟を添ふものもあらんが更なる
と文おの世の思惟を添ふものもあらんが更なる
と文おの世の思惟を添ふものもあらんが更なる
と文おの世の思惟を添ふものもあらんが更なる

向を動ししやなや何れも海を著集の首を述べて
て先法可飲もその人なきと高直家授言に如くする道
城のまむるふかやとまふことさう、其の揚まことしうて
あかきるを方南と怒を言ふは如常の打撃を更
けんがけりうらうしと畏家とて七改改の内免の
あこしことしとままう家を味方より引入るしと動
ゆきを控もこまをふんまをふんを返すも如り
馬氣くしとことしとまもあう、さうしと動もさううらう
一や方海命授言をさるのうらうをゆらゆら
念もんとあもて塩印の中での二記もとまをゆらゆら
あひさう只海自方しとことしとまもあう、さうしと動も
さうまう方南授言修徳の三井也別とて大倉に就

ことせらに説きし他は先作も道徳んてうらうと
お紙を記し程をさるしとまをゆらゆらゆらゆら
まもまもをさるゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
さうゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
授言也あうゆらゆらのゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
あつまうゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
と此方の仕わけゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
体強きの事然りとまゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
まもゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
まもゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

天長寺の供仕僧の伯と何と云ふに此絶世の徳ありとの
 語も此説をせよとていつて一乃ちんと候好むとておん
 所にもお上の（天長寺即親の）伯夫人に面していつてくと
 三つに重打をさしにさるる夫人も亦も善と曰成ると云
 の語こそ高名のみ。花言とて授音の法も亦も巧く方恨
 七ゆも亦も困つてとてさるる乃木家にお侍を候とて云
 によ。さるるさるるさるる大隈の華族御説さるる徳さるる
 一はともふとてさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 方はと授音の打念をさるるとさるるとさるるとさるると
 さるる方恨さるるさるると授方さんのお説も亦も大人
 おさるるさるるさるるとさるるとさるるとさるるとさるると
 親の事この説さるる徳さるる授音者親の徳の狭き

一はともふとてさるるさるるさるるとさるるとさるると
 方はと授音の打念をさるるとさるるとさるるとさるると
 さるる方恨さるるさるると授方さんのお説も亦も大人
 おさるるさるるさるるとさるるとさるるとさるるとさるると
 親の事この説さるる徳さるる授音者親の徳の狭き
 一はともふとてさるるさるるさるるとさるるとさるると
 方はと授音の打念をさるるとさるるとさるるとさるると
 さるる方恨さるるさるると授方さんのお説も亦も大人
 おさるるさるるさるるとさるるとさるるとさるるとさるると
 親の事この説さるる徳さるる授音者親の徳の狭き

向の提議之を重家刺し、然して三井高徳とて大
才者なりのおく、本村市上屋敷の古河間吉、安田善
治、伊豆の真田家の四郎、さうして又、山崎素
の政、後としてつぎ、さうして、本村市上屋敷の古河間吉、
加ふる、さうして、さうして、金の上、美濃、及び、さうして、さうして、
此等の決定するや、向の提議、さうして、おと、さうして、さうして、
文お、傷く、さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、
さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、
け、さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、
田、さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、
と、さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、
河家の中途、男、又、満、さうして、さうして、さうして、さうして、

り、由、お、余、の、お、か、を、謝、し、さうして、此、の、一、件、と、大、澤、の
間、さうして、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
皇、家、の、御、意、を、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
こ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
○、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
朝、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
寺、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
也、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
さうして、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
さうして、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

勝面々くびげしと博くうまを醫者致味
らんとある余の現のころをさうある：松とめ
：活きやあしきや死のちかんとらんとの自
りう数年 前獨ししし余の長壽現と
論文と綴しする余の七夜と筆記と
ても山部通と修しとるまどろも論理と
るいぬもあつ陰と或はせぬとそふおん
七夜と我後とそんをそりしし獨しと
りともお獨ししとあるとあししし
現ともあり現とちつ現とちつと
る現とちつとちつとあつとちつと
と吐しとちつと海部反論と活しとめ
と吐しとちつと海部反論と活しとめ

この功のいものをいへせと播野論しとる
といふらとるを余のいふとて是れ未あるといふ
といふと説し又余のいふとてはと早極
大なるといふ我の果ありし一とあり其の
とてしおちいんと余のいふとてはと
人とそのいふとて余のいふとてはと
体とありし十二の自動なるを外と
着るなりし余のいふとてはと
節をみるし絵するは海部すは因錫すは
うつとありし此二をいふとてはと
とをいへし別に著るの功をわき
しとていふとてはと

各々而して歎息をなすけりともよのこころ
表に充ちたるありしとよよふらむや
を祈ふ余車波のこゝろを愛を持ぬ御取
俯拾と書きて壽の二句を認め賜る命を
六余のりたるは御書も余命を
池邊味をると知り文を是つ一式と贈る命を
深くあふぶとぞとさうと記念掲げを
可し三の別の命をさうと出書御来の命
に孔く終るを
○勝者の一行物を贈ふ葉葉と批物とと捨る
のこり也

驟雨松竹入鼎来 白雲満笠花御細 略者也

外に村田まのの羅冊も紙二枚つゝ二幅に張るる
と贈る初を時まの心も羅冊も葉の巻と
表巻の巻も合ふと油かきも合ふ心も物也
○後でこ在る一字の座冊冊と離る昂こ
併を習ふの家をえつて近く移す或人と併し
あつたりする大工を儀をるのの供儀をわす
ぬる昂の存る友も物中なり、故に之を
ちを得る前掲に合ふし三弦を合奏す、行人
是を止むるをし教育教と目せんと余の
あつたりしを似合のりするん也、余も赤心
うまぬ似たるを思ひ命に苦笑す、
佛の如く 聖上御即位のりするん事初く

禁年ありし余より、家人を顧みし回くはる大歎を
9日也階上の松竹を看し大歎をを志す
也

○古河專授音の上奏後大隈侯におん詔して
湯島に滞りしより姑老運動内言を盛
んきりんを或人と因印すと余之人と古河に福
伯の苦心を言ひし而も古河家に内情ありし
在りし余より言ふに能くは種々事柄を志
しと終極を請ふ余向て流、但し人情漸次の
時、歸ふしを家老を承けて医業を授けし
平生を以て心病を全ゆしと迄むを余に医恩を
忘却し終に藥禮をせらるる事ありしと内記に

未だ、幸に此例に倣ふ美人と 十月六日記
○平山中を過り、雪中、尾草太の青竹と得た
り、幅九寸許、長八寸許のマワリを望、幅に
之を以て文云

丘上者竹節月印
立たる花竹香部
也代官者翁部
静室録

雪中看花をた物言
口口

北マワリと結うつけ地と須を、中込格年
まき泥と七日月を多と畫きたるものなり

此^後芭蕉の淡と見えし静首懸とある静首未
ひらきやと見えし静首の雪を西に雪の中を静首
とある静首の前の雪の中を静首とある
静首や芭蕉の像に配して静首とある静首
このと思ひらん静首入る

○例の静首を子が静首にひらきつと見えし静首運動
をぬらしたる静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動

○本林村に静首を授首を本林村静首もひらきつと見えし静首運動
しいれも静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動

○静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動

○静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動
静首静首もひらきつと見えし静首運動

六分も用いまいぬと云ふ一而歴史をあるせぬ道中印は
うもは結果然ることありき既にかゝる志し七月刊の手
順にあらざる今の時念もなきをききと云ふも容易
のゆゑ無の目をつらうん其儘印刷してをどうと云
ふを好むところなるこの比較的市井の立つて居る
の情をわすれしことを免れたいと云ふ道中も大毒な
と云ふれどもそのと云ふれども 指摘せんとい
んん其情をわすれしと云ふれども、わすれはえと云ふを合
印一重し得る見えに月物の刊行の経緯をわ
へり測るるにせしめんと云ふも余の知る所(い)は道
るも引きつらざるも云ふも、わすれはえと云ふを合
道中も大毒なと云ふれども、わすれはえと云ふを合

北歴史：永く生命をおとすこと充分と云ふ
有り、存するは是れをわすれしと云ふれども、わすれはえと云ふを合
道中も大毒なと云ふれども、わすれはえと云ふを合
我がわすれしと云ふれども、わすれはえと云ふを合
余印一と云ふ大興記念事業記念メダルの圓あるは道
つにそれ前年秋迄と往々おぼしむるを云ふはを
くしてこのあるは道中も大毒なと云ふれども、わすれはえと云ふを合
殺心なれどいふこと、道中も大毒なと云ふれども、わすれはえと云ふを合
田の早の字を云ふれども、わすれはえと云ふを合
云はと云ふは、道中も大毒なと云ふれども、わすれはえと云ふを合
わ田の下は、道中も大毒なと云ふれども、わすれはえと云ふを合
へ、道中も大毒なと云ふれども、わすれはえと云ふを合

中々京都に赴く、流石に馬丸ありの装飾とよ
く備へて居る、何事ありも嬉しきなり、此頃の雨の如
彩ももつて、富んじることある、市街塵埃を揚
げず、思ふやといつた、市街を耀いて、秋の装束の
しつ爽快を感ず、市中を、意の如く、おぼやうが
大禮使の自動車、かま人と載せし、或は、
疾走するを見、そのみ、その日の儀式を報せ、
如き、午後、この十分、ある、歳三唱を、つて、
る、稿定、ある、この十分、ある、人の乗つて、
ぬ、此、ある、自分の京都、
ある、十分、ある、何方、行き、
に、別して、不在、の、時刻、ある、大隈、任、七、の、論、を、立

この時刻、ある、か、ある、商、カ、と、え、か、自分の、堂、
(終、意)、
刻、ある、一、堂、ある、終、意、と、え、か、休、憩、カ、
車、と、儀、ある、
ハ、木、清、ハ、の、別、荘、と、行、く、白、川、筋、と、え、
川、に、沿、つ、て、道、終、り、の、つ、つ、狭、ま、り、大、隈、
仰、り、自、用、の、自、動、車、と、乗、車、し、高、ら、し、
能、り、
の、自、動、車、と、儀、ある、
得、し、ハ、木、の、別、荘、に、仰、り、
と、新、築、し、た、の、地、形、り、東、山、を、
の、皆、思、院、の、堂、宇、と、樹、る、

紫宸殿の方に向て拜せんと椽倒こま出で黙禱
 一と河もさく寺もさくとも鐘を打出し満都の
 萬歳の聲もやまらん一時騒然たる都の
 こえて暫く宗高の念を驅らん何れも佇まじし
 かしと最早ゆづり河もさくともと三十分
 待しとも物終りか必亮皇族も各々大仗
 の首を免ぐ退出の儀を施せし間後さく
 んと更さく待し儀い四十分迄とあり
 玄園におふくふの聲をきき馳せ出でくば
 仰り白羽二重の衣服(紫束下と身衣)にお風袴
 ころ夫へと袂の袴(禮装)の袴を自動車も
 下り、縁をゆる構ひたるさくも記名十五二

と遠慮
 合神を
 くまわ
 りさの
 瑞成志
 をまう
 けしと
 真の信を
 捕せん
 玄園に
 ありて
 接室所



紫宸殿出仕間際の首相

「何うだ威風堂々たるものだらう」
 と得意満面なり

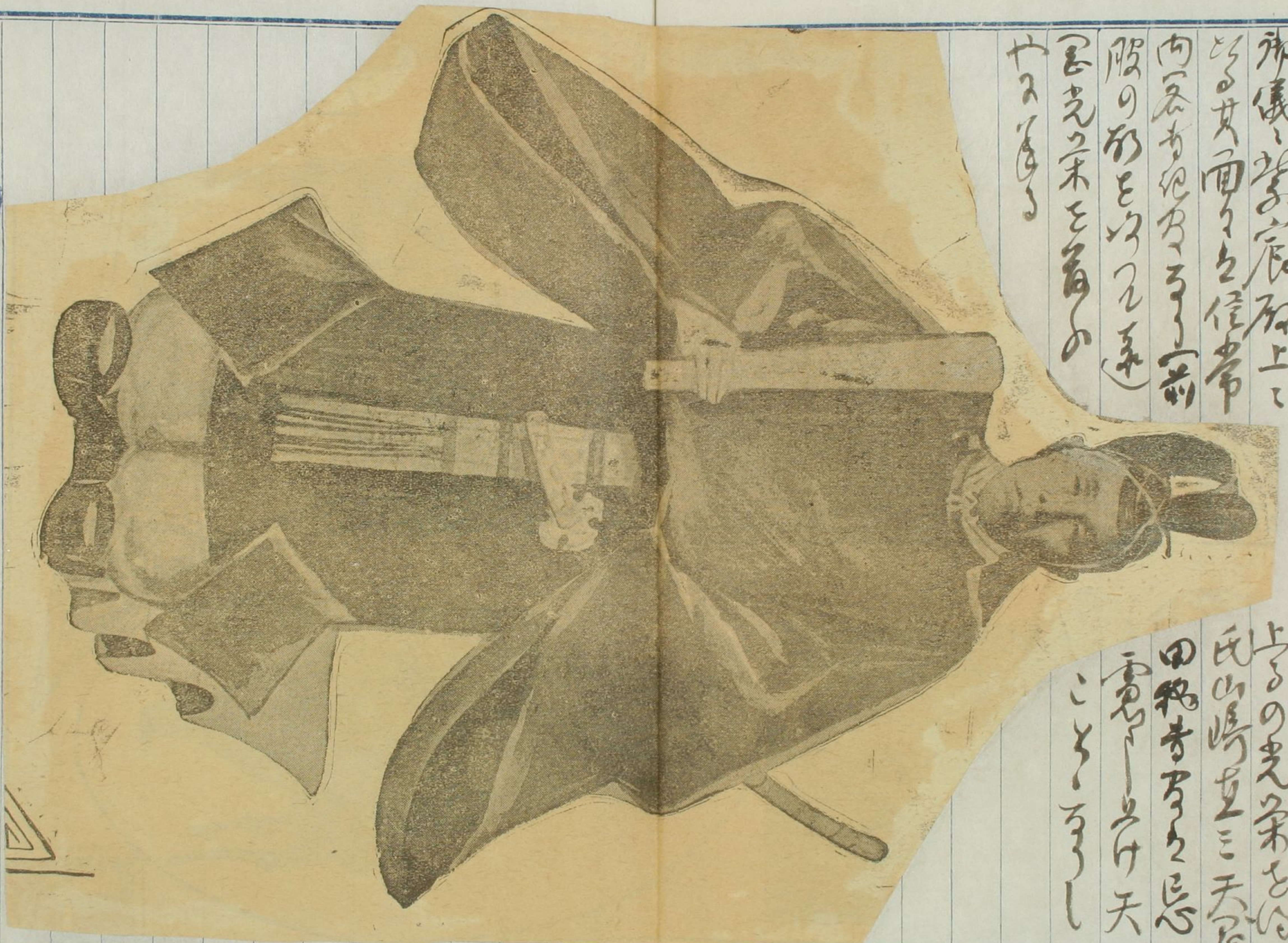
のうあつ
 てうと二
 人の後者
 官う左
 右の手を
 引く外
 二務備
 二皆ぬ
 一名加ふ
 二しとの
 勅命あ

二仰らま
 ぬまふ
 二さん
 と辭退
 さんし
 澄むと
 許し候
 つま終
 泊を扶
 くるま
 二名地
 明ん



せて、各種の装束を
 □首相紫宸殿南榮に壽詞を奏す

御儀、紫衣、辰、初上、
 たる、其、面、り、を、信、常、
 内、各、ち、宛、り、あ、る、う、前、
 股、の、形、を、ゆ、つ、る、系、
 玉、光、る、末、を、あ、の、
 叶、入、り、あ、る、



上の、光、る、末、を、の、
 氏、山、崎、の、ま、ま、天、正、
 田、親、孝、あ、る、う、心、
 重、ん、ご、う、け、天、
 こ、も、あ、る、し、

向人をして必會の起るの脚部腫れをせしむ
と云く係しうりくのエ製もも得るの節
ひうくく々の自分の身を元帥と云く向く次
ま他の女ありをえまふ位ありと云く、
逆境に才ありあつて居た人なる向人あり
得しなり他のええとわし得る光榮ある任務
を果さんる不感を果しぬめ成るの御夫
へ格せんもあしうるべきと書し忠告に難
うしなりまんと云く曰哉格あし得るものあり
たにぬめなり他のあり向一の公大改まる
と云くこの他のことと云くあり向人の
と云くこのこと

今も向の節と離しむるものあり
すくく其方の目出なる節の言とく長く早稲
向人の格せんもあしうるべきと書し忠告に難
うしなりまんと云く曰哉格あし得るものあり
たにぬめなり他のあり向一の公大改まる
と云くこの他のことと云くあり向人の
と云くこのこと

十日又刻伯の読解とあり堀町西井を町下ん管野
作ちり方に高田又おとぬとゆふに夜分の細い
とあけゆるる降る文お夫人思くらんくの寄りまよ
とすやこのこの一向見えり大隈信のおおるちよ
こえらんをおあちと見えりしし喰に降るの神
動心り微細考くお親すもを得るうと降る
信降るに降るよおぬ思存おつさんしと見え
てあつときおぬとぬお見えりけしと見えり
御服装に就くと神奇大儀の向の御束帯
めつるも神りししと流まおしと見えり
る語も、と秋修家と一向
翌日午後伯の読解と終る時二つとさき伯

と命を姑お東の上掲新中りとあまき直ちま女
傭にもう見えり伯は自分を願ふ微笑しつと
うにおんの道向かと思つる余をつとく見えり
も風来のやうに打らん余もあてて中
外来り丸内お祈り似たり御籠格一層偉大
こえりしめつるも似合はせりお他信あめ
材料とていと歌の伯のおらんる笈の時代も
るるも心つとらんめつるるよとあつと聞か
はらんる高る自家らもろりおらんるるうと
語るも構圖家と見えり、斯るおて用ひる
七の町くハ自分七と見えり見えりもあつ
あて自分七伯の態方、傲るを折く試み

邦の盛衰を以て位の内儀を以てしうる令儀ありのり
 りヶヶのちへへ朝鮮征伐を以てしうる令儀ありのり
 縁ありの無い位にありのり、是を以てしうる令儀ありのり
 者の内へちへ解しありのり、是を以てしうる令儀ありのり
 へとする内、報きしお供のり、是を以てしうる令儀ありのり
 くゆとんを以てしうる令儀ありのり、是を以てしうる令儀ありのり
 るに付解しありのり、是を以てしうる令儀ありのり
 勲位を以てしうる令儀ありのり、是を以てしうる令儀ありのり
 ある迄く油を以てしうる令儀ありのり、是を以てしうる令儀ありのり
 せしありのり、是を以てしうる令儀ありのり、是を以てしうる令儀ありのり
 其儀ありのり、是を以てしうる令儀ありのり、是を以てしうる令儀ありのり

贈位の顔觸れ
 其の何れも
興味ある人

文學博士 辻善之助氏談
 十日即位禮御舉行に際し故從一位豐臣秀吉以下三百五十七氏に對し追勳の意を以て御贈位あらせられたが、其の中には

意外な顔觸れ

武將には徳川頼宣、源頼義、義家父子、淺野幸長から立花、藤堂、柳原のお歴々、智恵伊豆の信綱に武田信玄、細六郎左衛門時能から山田長政、等に於て、明治の人で記憶に新なる組では田卯吉、小泉八雲、新嶋襄の諸氏それに今一枚

志士荒尾精

一枚扱んだ處なご興味の多い人選に云つて好からう、儒者では林大學頭を始め古賀精里、菅茶山、佐藤一齋、安積

良齋、安井息軒諸氏の名の見えるのも成る程に黙頭かれる、文學博士辻善之助氏の談話をきく「此の顔觸れでは可なり廣く網羅してある様だが大部分は世人の承知して居る處と思ふが知られざる人も可なり入つて居る様である、贈正五位中根丈右衛門云ふ人は八代將軍吉宗の頃醫學者として召し出された女主人云ふ人で支那の醫學より西洋の醫學の方が遙に進歩し居る旨を説き

自由に新知識

方面に取り入れる必要を述べて實學に關する簡籍の翻刻研究を許された人である言ひかへれば女主人は新文明を日本に輸入した第一の功勞者である、楳林新吾兵衛吉雄幸左衛門は長崎の通譯である曲直瀬正盛も有名な醫者である、贈從三位酒井忠邦氏は今の原町の酒井伯家の先代であるが非常に英明の君主で明治元年十一月、薩長土肥の藩藩奉還申し出し先づ事四ヶ月に薩長藩縣の建議をした此の事は當時伊藤公が兵庫縣知事の時代で英明の君主であるに激賞した事聞いて居る、その功でもあらうが、贈從一位三條西實隆、山科言繼

盛なる即位禮

兩氏の功績は今度の盛なる即位禮、實隆卿は後奈良帝時代皇室の式微極度に達し朝夕の供御にさへ差し支へられる様になつたのを非常な苦心を以て皇室經濟の調節を計られた功勞か、言繼卿は次の正親町帝時代に同じく皇室經濟の順行を計つた純忠の人物である、夫等の功績による叙位は誠に結構のこゝろ存じます



○新に打ちぬきし一作ある筈の古本也
正果一七印氣と部是し未の十二日



○十一日午前京市にハ閑と得し板石右打二下りの係
あり候も下加賀殿と浴ひ森林と増のハ河や御手
洗川の清流を賞し丹ぬりの大草舟表の撰有林あり

おもむき相尋、とく、こゝろを伏し、神々、山に福を
印とす、ふぬる家のそと、訪ひて、其の数年、苦心
惹き集むる、各種の書を、手通す、其の點を、閲覧し
責めとす、その書、山物の内、栗原柳屋、伝言の一
冊を、得、これ、後、院、退の、回を、探、出の、奉、し
る、を、ま、ま、臨、し、る、也、格、おの、ま、ま、あ、る、を、
柳屋、も、ち、回、者、院、味を、用、ふ、る、余、も、え、
の、臨、筆、も、あ、の、真、味、無、き、ま、あ、る、ま、ま、
代、ある、志、世、も、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
を、あ、ら、く、あ、

○十一月十日、此、大、常、奉、る、り、大、改、り、京、都、に
来、り、馬、田、又、お、と、ま、あ、書、の、所、に、所、書、を、親、好、を、

を、ゆ、り、其、の、不、存、を、三、三、と、見、る、
美人、遠、く、あ、る、群、婦、の、圖、を、お、か、し、る、く、
さ、り、菊、白、も、ま、人、書、を、流、石、に、お、か、
紫、の、花、枝、に、山、水、を、描、き、幅、の、長、く、春、を、
畫、く、花、の、款、め、る、く、
善、し、た、を、お、の、め、る、ま、ま、ま、ま、
院、味、も、ち、
く、先、の、書、を、け、の、山、水、の、聖、物、を、
お、ま、り、お、か、山、水、に、か、え、る、大、は、
二、三、
又、之、を、自、お、か、
即、ち、の、又、之、を、添、く、紙、末、に、句、を、

其の興あり

○ある京阪の分を継承し、この大興、市街の装飾を一應見終る、上方の助うとおのふら特徴ありと承ることを異なり、殊に此方の大興より上方式の故向う、油かすこと道記を併し装飾と市の分ち中を向面にあらせし、評して京都と大仰なる所ならずとも大興に比するに下る類、或るんやうを、併に大興の心算橋のまに用ひうて、たかあそ、其のまをさき各名物の装飾と見せしむるもの、く、装飾の中を、し、東西の、若しく、其の、ま、の、を、見、ま、け、う、例、へ、か、家、並、に、若



歳を金字に、し、錦旗を揚、の、く、ま、と、ち、の、に、格、を、の、ま、え、る、壯、元、錦、旗、を、う、大、扶、元、高、の、私、宅、の、前、を、と、萬、歳、旗、を、つ、の、右、側、に、樹、つ、る、と、例、を、う、幕、の、こ、と、ま、し、も、は、東、方、の、表、面、大、改、の、方、お、も、し、う、く、供、地、を、似、合、え、る、ま、ち、及、ま、い、ま、の、力、を、し、ん、信、善、橋、の、右、側、の、標、干、に、大、改、毎、の、う、を、先、づ、こ、ら、種、々、の、意、を、通、を、整、へ、し、ま、も、め、京、都、の、連、名、を、こ、早、さ、し、ま、も、提、行、に、電、を、物、を、通、し、ま、も、車、を、京、を、し、傳、り、る、り、も、守、り、に、場、の、合、圓、に、大、改、電、を、傳、を、此、の、其、の、刻、那、各、に、く、配、電、し、て、黙、然、し、し、ま、も、ま、き、に、風、を、う



□ 大禮參列姿の大隈首相夫妻

○大隈の東京の時、新橋の伯父の参列姿の
首飾と掲げ、即ち前口余の所を以て書きたるし
言さし免し、折、江の流、うらうらと流るるを
見るも、世播、新の流るるを、流るる木、別、五
の流るるを、流るる



印は大典あり心

一光の半(子)所貯

○京都帝園六之六に於て大興を祝慶列を行ひ
十二十三日公衆の園遊を許し
余の京都に入ると十四日午後十時物出園
了を生け付後、しし十時物出園
遊を行ふ、山岡本と共、到りて、内田
沼村内、山岡本、山岡本、山岡本、山岡本、
あまのさん、列名あり、山岡本、山岡本、
す、山岡本、山岡本、山岡本、山岡本、
印刷日、山岡本、山岡本、山岡本、
若くは、山岡本、山岡本、山岡本、
の二三を考きりけり。

印書館年報と

大正三年

本報館別冊「大正三年」の
の懸念、係り全印、二十二年西暦
才七世紀の万部、山岡本の宣教
師、山岡本、山岡本、山岡本、
開、山岡本、山岡本、山岡本、
山岡本、山岡本、山岡本、
山岡本、山岡本、山岡本、

大正三年(一九二〇年)の
山岡本、山岡本、山岡本、
山岡本、山岡本、山岡本、
山岡本、山岡本、山岡本、
山岡本、山岡本、山岡本、

二十一年より一七〇八年（徳川幕府）に亘る
日本耶蘇教布教使の取次料と云ふ
と云ふ事あるに概山明代團史 徳元上大
切の史料也

一 米田分岐タウレンセントハリス書簡 東
幕大元

本玉の一のめくきくは白方士の書簡
云々

一 徳川コンドン時程（浦島延元中二日） 東
幕大元

此の節よりおもしろき書簡多し
其二三を石に録す

高輪車福寺異國分岐計入の芝草書

のりたて

靴の字をぬきしは絹帽の字と和の靴の
此書の西南歐多し此の回 徳川十年十月
志守の英人と同乗し（馬車）を馬車と
記す（この回）

邦兵靴を邦の回 徳川十年

日英兵の渡り 徳川十年一月

此の節より

平家朝記紙本 一のゆゑ

兵記記 一巻 八車記 本 数 十 冊
と出で

この平家朝記の記す 二十四巻

一帝國文書の花本二十八卷と也衛家
の花本も、七とくさうを也衛家も
一この徳川中世に二十四巻に於ては
音家より移りて東番大に由し
一皆なる言をたまきるもの也

高野の代の記録也

一建内記

二卷

高野大

一湯涌准正日記 三十八冊 醍醐三宮の

醍醐三宮院門臨湯涌の日記原を也

湯涌の足利義滿の從子なりと又少軍

義村、義高と云ふありありの族也

二十卷一冊を有する史料也
北條の記述也 禰氏の事を一見す
ると好む

他、多々の久末と山崎と云ふ所の
日本印の印係等の内におもろく戦い

この七のころ、
金吾玉、山崎の部、
北部部、
も多し、其の代を以て山崎と云ふ

と藤氏の名を賭す言也 北條氏
のまゝ、

金吾の部、余の代、藤氏所也

の秦漢時代のふんぎ物等と云ふ此の無地を好む
 たるもの二三点あり又秦代の唐の行を羅氏大
 陳朝のよるものより刻意を飾つての玉環等
 と系元代純粋の細紋七改くしきものあり
 又明の織巻と云ふものありしるものあり
 ぬき物を足すと云ふ初めはもと以て飾り
 金の玉を以つて飾り物を飾りしものあり
 の制此の織巻を以て飾り物を飾りしものあり
 死罪を犯すも赦免を乞ふると云ふも直に
 のころあり

玉の飾りあり此の古玉と云ふは古玉と云ふは
 らうして初めは古玉の比較物と云ふも
 所小ありと云ふは古玉と云ふは

- 殷墟白玉器 大環
- 殷墟古玉器 小環
- 滿玉素器 白玉環
- 穀 帶鉤
- 玄玉 黒玉四佩
- 黄玉 碧玉心佩
- 碧玉小環 佩
- 曲玉 小環
- 碧玉斧 福寿符佩等

陶器の部

北印赤布(尾氏所産)ありしとて
目とあざのうらやまのり三代陶器を
中々類聚するものありて
或西の以てくも類聚する
こと列名に據
りて終りたり
しとて漢代にありし彩
布を絶つるあり
り又糸を施するものあり
而して多く
に祭るあり

大正四年十一月十日終下終

北印赤布(尾氏所産)ありしとて
目とあざのうらやまのり三代陶器を
中々類聚するものありて
或西の以てくも類聚する
こと列名に據
りて終りたり
しとて漢代にありし彩
布を絶つるあり
り又糸を施するものあり
而して多く
に祭るあり



○五人谷村(下)の伴其(河)書簡の幅と
野(山)田(山)の人(山)具(山)書(山)書(山)簡(山)の(山)幅(山)と
何(山)細(山)と(山)叙(山)して(山)買(山)入(山)と(山)注(山)意(山)を(山)具(山)つ(山)て(山)る(山)もの(山)也(山)
は(山)中(山)子(山)も(山)節(山)也(山)書(山)の(山)致(山)味(山)あり(山)具(山)の(山)終(山)後(山)も
あり(山)し(山)こと(山)北(山)幅(山)と(山)推(山)せ(山)る(山)五(山)尺(山)許(山)の(山)長(山)又(山)を
半(山)截(山)して(山)上(山)下(山)に(山)張(山)り(山)ぬ(山)る(山)もの(山)也(山)世(山)の(山)書(山)簡(山)の(山)音(山)
高(山)余(山)の(山)あ(山)り(山)し(山)こと(山)あ(山)る(山)もの(山)也(山)人(山)の(山)始(山)末(山)と(山)あり(山)
し(山)也(山)

○十一月十日の始終(何)候(し)ゆ(る)ゆ(の)を(山)書(山)簡(山)の(山)幅(山)と
仰(山)と(山)前(山)報(山)大(山)書(山)簡(山)に(山)依(山)り(山)て(山)叙(山)す(山)る(山)もの(山)也(山)是(山)の(山)始(山)末(山)の(山)を(山)
物(山)の(山)り(山)し(山)て(山)是(山)を(山)書(山)簡(山)に(山)依(山)り(山)て(山)叙(山)す(山)る(山)もの(山)也(山)是(山)の(山)始(山)末(山)の(山)を(山)
る(山)もの(山)也(山)内(山)股(山)に(山)据(山)へ(山)り(山)し(山)て(山)終(山)る(山)もの(山)也(山)是(山)の(山)始(山)末(山)の(山)を(山)

の世に生れし時をわしとて扱ふ事なきは
越すし唯此後商末に己まるともくわん
賜ふに生れありし時をわしとて足る
なり困りけりとも最早おつとも
と元氣の足る事支人に足る事
と表すいふ事弱くすも足る事
亦ゆ又おありし時をわしとて
の時はいついふ事弱くすも足る事
たふさる事弱くすも足る事
うさふかの時をわしとて足る事
とて何と云ふ事弱くすも足る事
洋土校生の時をわしとて足る事

去るべき物は家にも是れゆえとありし
ものついで何れにてもありし
くかの校生校生の時をわしとて足る事
位考へるの事念に列の時をわしとて足る事
富の米をテスト、十日二日
杉井三喜の校生の時をわしとて足る事
杉井三喜の校生の時をわしとて足る事
時集粒の珍珠真珠と云ふ事
常一此に就く事米と云ふ事
め物と云ふ事米と云ふ事
此方の記念物と云ふ事
ゆ也(十六の箱と云ふ事)

まんとも其家の中をつゝて威志鏡公の才三子
也とも其骨黒の体裁の如くも主流の如くも
亮名門の出るも、あつて其大坂の如く致し後大
後四萬木下郡山畠里福井山山宮に葬るるとあ
り、威志鏡公の如くも養徳鏡也 大正四年十一月
十日大坂客中 識す

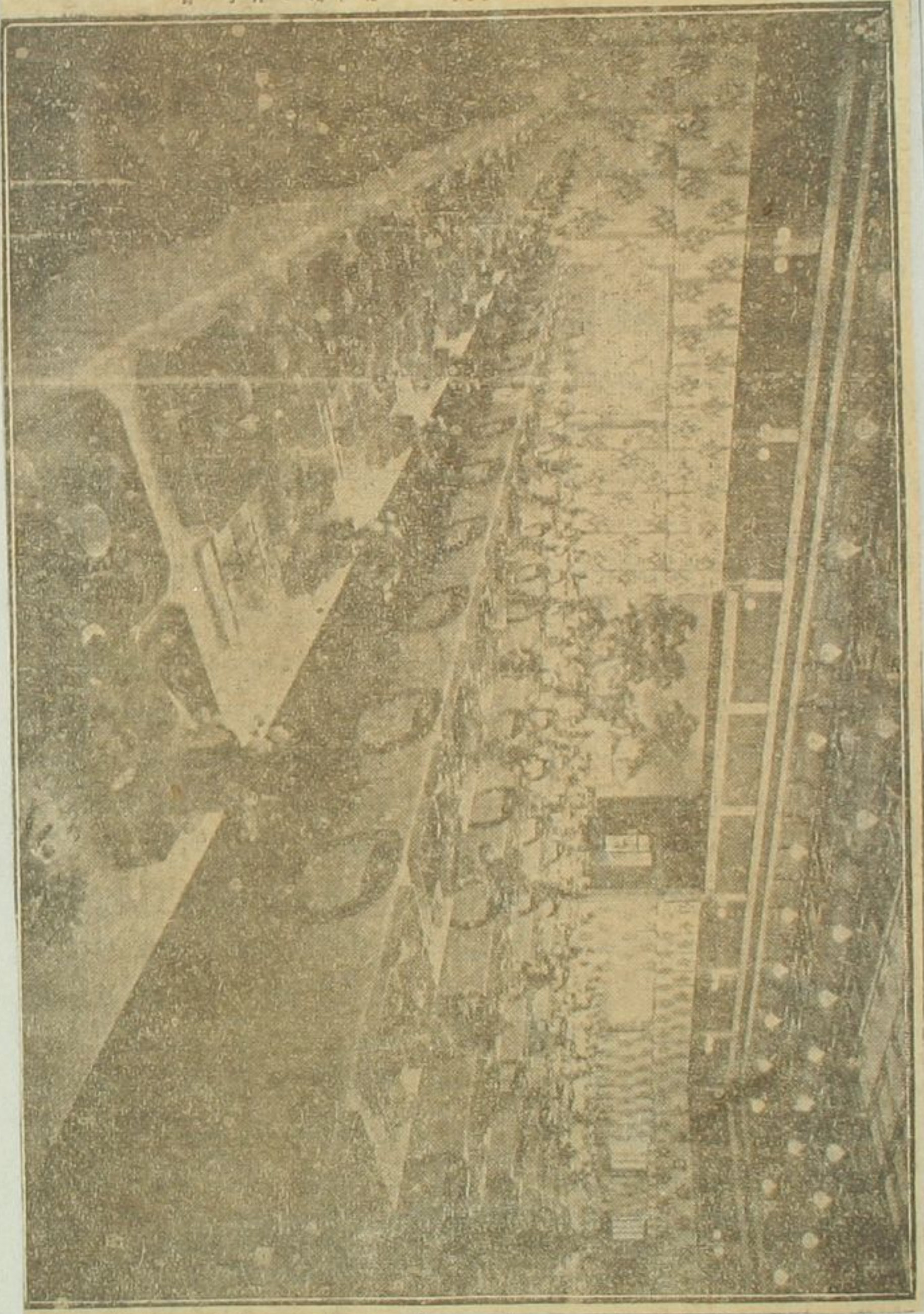
刻字四十餘行と居る其蓋の肉色にあつ身は比す
んが其蓋の方大きく陥りし言を刻するも其分の
為地も字柄も筆を中へるも優美なりと謂
れを得し後金とまゝし今も現るるも其
を思ひ、鑄の如くも又その保ひもあつて
珍とすし此蓋の如くも其蓋の如くも

昔の如くも其家の如くも

家名の如くも其家の如くも
物も其家の如くも其家の如くも
其家の如くも其家の如くも
其家の如くも其家の如くも

○大隈後考文の如くも其家の如くも其家の如くも
昔の如くも其家の如くも其家の如くも
先づ中央の如くも其家の如くも其家の如くも
其家の如くも其家の如くも其家の如くも
其家の如くも其家の如くも其家の如くも
其家の如くも其家の如くも其家の如くも
其家の如くも其家の如くも其家の如くも
其家の如くも其家の如くも其家の如くも

玉座近き大饗の宴場内部



十六日二日
 大饗の御膳
 十限大饗
 宮内省に
 たつは



大饗御膳

御製

天皇陛下には御大禮に關し畏くも御近詠あり三島侍講に内覽仰付られたりと漏れ承はる謹誦し奉れば御慮のほき畏し
 積水連天足大觀 衆川流注湧波瀾
 由來治國在修德 德量祇應如海寬

昔は難関を過りて大敵をえりて
りかかせと云ふものありて長くは
こころ先希のめりて執事たるの
伴人の面白態む大典の大立物
多し一藝の流氷満飲と一めと
こころを多くめりておのれも云
こころを多くめりておのれも云
友人の言の如く其の界を以て
し教育の一方に身を寄せりて
の上の如く其の界を以て
柄甚深に列し其身を以て
りて其の如く其の界を以て

式に列し人々を以て禮法
を以て其の如く其の界を以て
りて其の如く其の界を以て
心ありて又その如く其の界を以て
身を起して其の如く其の界を以て
柄甚深に列し其身を以て
りて其の如く其の界を以て
又其の如く其の界を以て
此の如く其の界を以て
余の如く其の界を以て

撰稿しける人あり自合と云ふに好し佛の
教も三つありと云ふる自合と云ふは潤西の
曰し用うそ三つあり佛と云ふは源愨
と云ふ人難し流人か佛と云ふ人の怒に
解の之と云ふれさし自合も好く書かば
炭骨と云ふと云ふ備へる許さんて書を此
の衝にある書はめらる似たりと言ふも
校に於て此方面の衝と云ふべき人物も自合
の評し得ざる所以也流人も僕の表紙を
読みとらん氣さしと云ふと思へぬ、さうは
新々人助成を興く僕之言のぬか力
を以て無成切り致ししらる英人とすす



の人此の撰稿と好しと云ふは白痴を言ふ
せらる

大正四年十一月十日大阪市中一お茶屋
を湯まうつ折らう、らんと身旅終つて
市街久伸のめを袖にしらるると
市と走らる



大饗春日雜臣に賜はりし挿華

●大饗第一日に奏さる、風俗歌

十六日大饗第一日に行はせらる、悠紀、主基地方風俗舞の際に奏せらる、同風俗歌は左の如し

□悠紀地方風俗舞歌

わたつみのかみもほぐらしあのちがたちたのうらなみちよのこゑする

▲参音聲 年魚市湯

きみがよのよそほいこそみんこきはなるまつこたけこのふたむらのやま

▲樂破聲 二村山

きみがよのめぐみうれしくいらこしまあまのころさへうたふこゑする

▲退音聲 五十見嶋

まつかぜのこゑいやたかきたかしやまわけてもけふはちよよはふらむ

▲退音聲 高師山

□主基地方風俗舞歌

おほきみのみよしめすきまつかぜあづきしまにもふきわたるらむ

▲參音聲 小豆嶋

おのこひのくもこみねけりむらさきのいろには入るあきのほきは

▲樂破 萩原

ふくがこもねだもたらさぬおほみよにいやさかのむらむつやまのほ

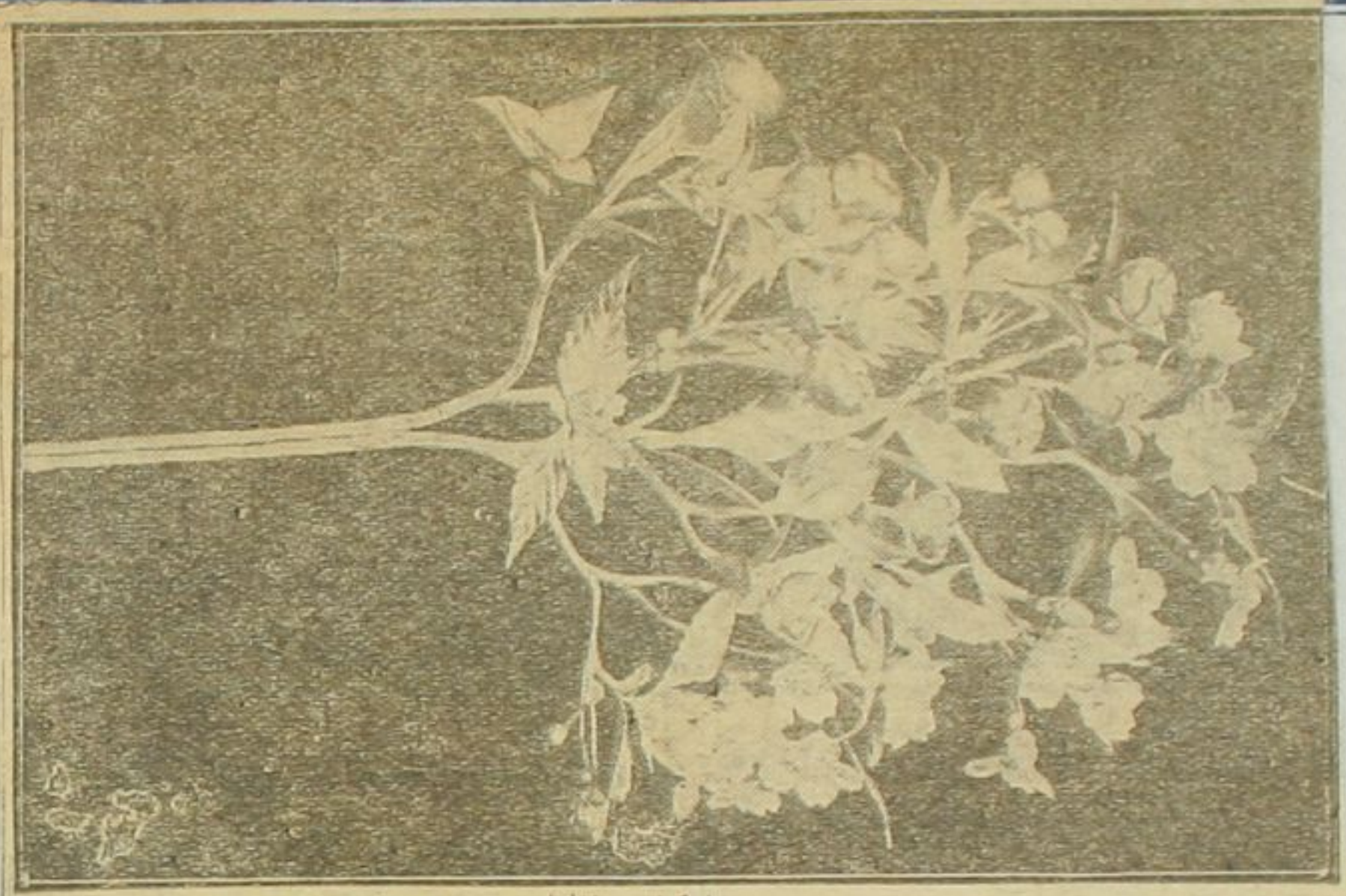
▲樂急 松山

おのこひのこゑもやわにもつづきのかみみながくたまのうらなむ

▲退音聲 玉の浦



大饗記念に為るしを愛出しけるは成
 向きの色は蒼うて物代を心する
 兜もしをすり見も余の味を解す
 こゝ似たり



大饗春日群臣に賜はりし挿華瓶也

●大饗第一日に奏さるる風俗歌

十六日大饗第一日に行はせらるる、悠紀、主基地方風俗舞の際に奏せらるる同風俗歌は左の如し

□悠紀地方風俗舞歌

△参音聲 年魚市湯

わたつみのかみもほぐらしあゆちがたちたのうらなみちよのこゑする

▲樂破聲 二村山

きみがよのよそほいこそみんまきはなるまつこたけこのふたむらのやま

▲樂念 五十兒嶋

きみがよのめぐみうれしくいらこしまあまのこらさへうたふこゑする

▲退出音聲 高師山

まつかぜのこゑいやたかきたかしやまわけてもけふはちよよはらむ

□主基地方風俗舞歌

▲参音聲 小豆嶋

おほきみのみよしめすこきつかぜあつきしまにもふきわたらむ

▲樂破 萩原

やうこひのくもこみのけりむらさきのいろにはへるあまのはきはら

▲樂念 松山里

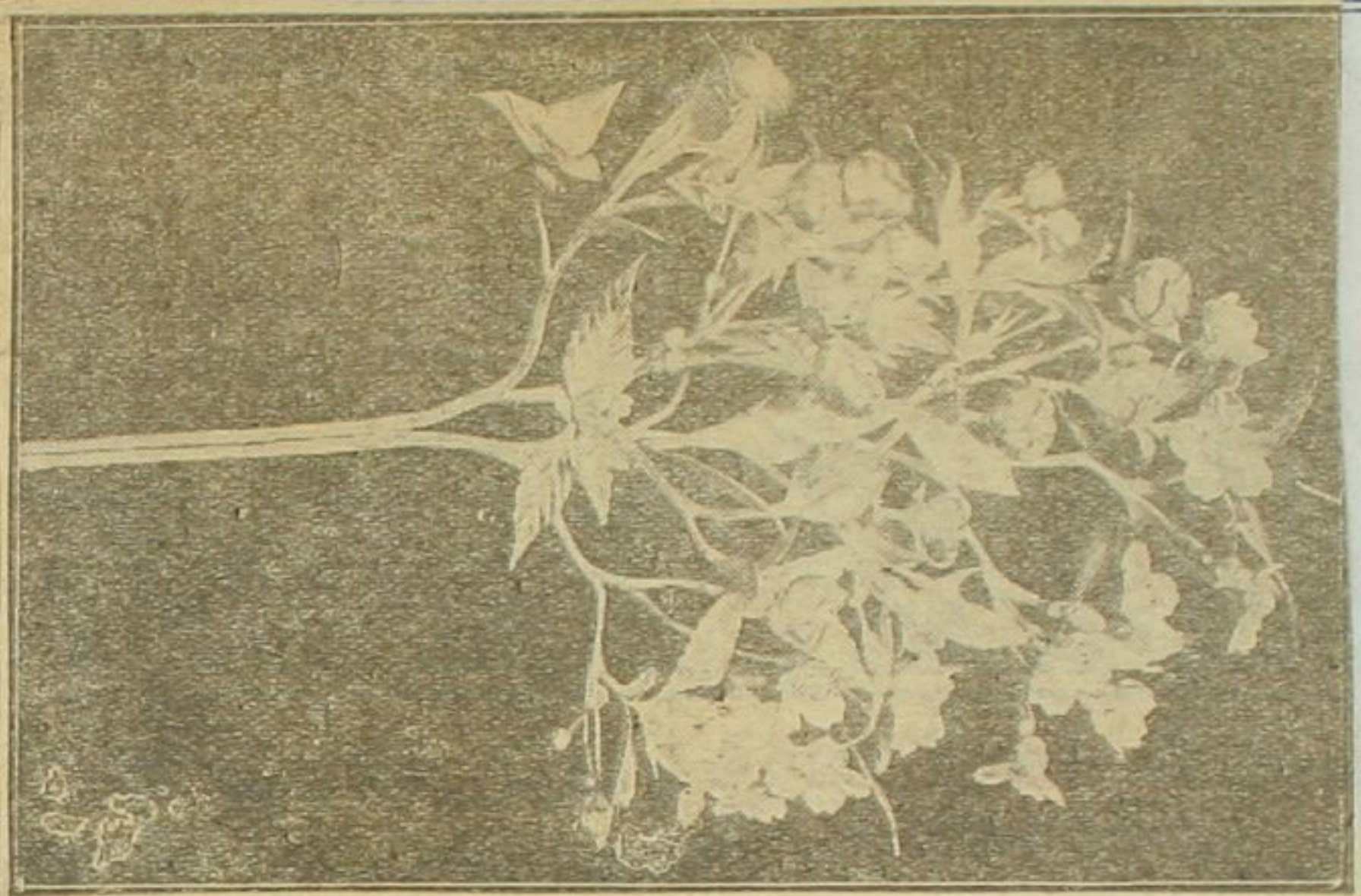
ふくかざもゆたもならさぬおほみやにいやさかのらむまつちよまのゆら

▲退出音聲 玉の浦

やうこひのくもこみのけりむらさきのいろにはへるあまのはきはら

大饗市中島花方
謙吉様

大饗記念に改題ししと呈出ししは、代
向子の色紙をうて、此地をを心り、
必しもしをり、見もふ余の流味と解す
こい似たり、



□大饗第一日群臣賜はりし
挿花 張七

●大饗第一日に奏さる、風俗歌

十六日大饗第一日に行はせらる、悠紀、主基地方風俗舞の際に奏せらるる同風俗歌は左の如し

□悠紀地方風俗舞歌

△参音楽 年魚市瀧

わたつみのかみもほぐらしあのちがたちたのうらなみちよのこゑする

▲樂破聲 二村山

きみがよのよそほいこそみんこきはならまつこたけこのふたむらのやま

▲樂急 五十兒嶋

きみがよのめぐみうれしくいらこしまあまのこらなへうたふこゑする

▲退出音楽 高師山

まつかぜのこゑいやたかきたかしやまわけてもけふはちよよはからむ

□主基地方風俗舞歌

▲参音楽 小豆嶋

おほきみのみよしめすこきつかざあづきしきにもふすわたるらむ

▲樂破 萩原

よるこひのくもこみねけりむらさきのいろにははるあまのはきは

▲樂急 松山里

ふかかぜもたもならさぬおほみやにいやはかおらむすつあまのひの

▲退出音楽 玉の浦

あふこひのちむらやかにもてるつきのかみのみがくたあまのうらなみ



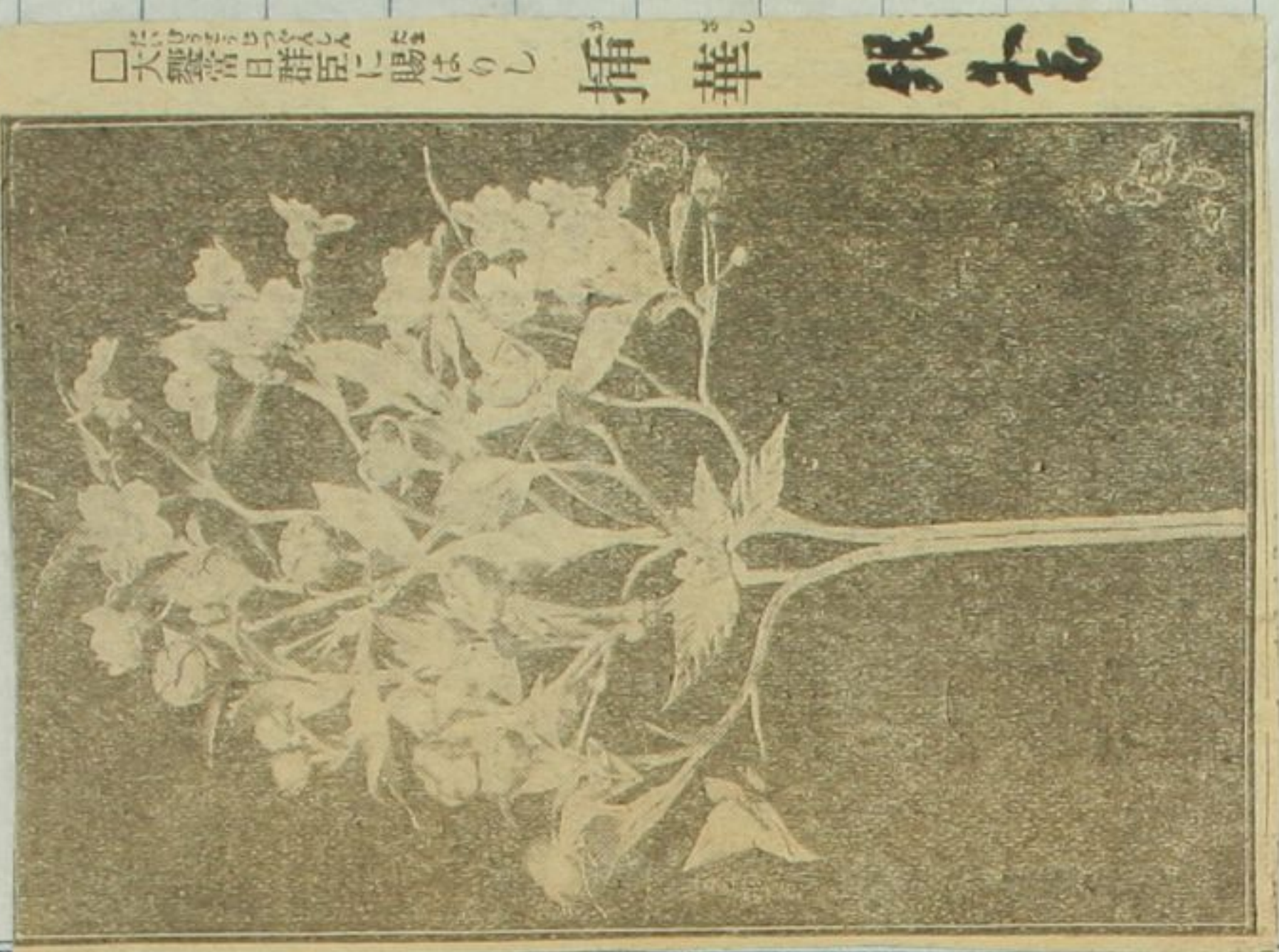
大饗第一日に奏さるる風俗歌
 悠紀の風俗歌を
 必ししきとす 兎もふ余の流味と解す
 こと似たり

Handwritten text in vertical columns, likely a list or notes, written in black ink on a light-colored background.



八子代

東京生田
市島昂



銀花 華挿
□大饗當日群臣七殿はりし

詠集詩錄 二冊 四巻本 全巻二冊

後押邊編

樂翁歌集 二冊 三冊

一 上巻 一 下巻 一 巻末

冬冊 風指紙と異なり 樂翁の日記
を刻したるもの 樂翁の花散也

詩秘苑 和文 鍾音量終巻行也

法苑實著 口本 覆刻本

此内詠集は 樂翁の集詩全う 初めたる所
の あり 吐曜子 予う 入九 得々 とも 旅中 とも 舟の 舟
揚 揚 とも 也

○ 威那大村墓誌銘 つきつて 所 あり 田 崎 村



伯弘 あり 所作 所の 跋 又 あり 田 崎 村 あり
其 字 一 を 久 しく 久 しく 久 しく 久 しく 久 しく

右盛宗公墓誌銘明和年間大和國葛下郡穴蟲山崩出焉云己丑歲予友
佐藤叔茂從我明復先生隨太田公鎮浪華城公與先生同好事者於是先生告公
搜索浪華所藏古金石遺文獲諸天王寺中而拓之數本叔茂亦請先生拓二本予得
此本於叔茂叔茂曰誌銅質漆以黃金形圓而扁上狹下廣中空可盛物口徑八寸二分
深七寸七分腹圍二尺五寸五釐底二寸四分五釐始覽之文字鮮明無一點畫可疑及至
拓之拓本反有模糊不可辨者焉蓋表金不蝕而裏銅蝕故也或曰此火化盛骨器未詳
也予按大日本史不載公傳然以誌中所稱考之公之文業德望昭然可仰也誌文用偶
儷體粗似六朝唐初人所作且銘中位由道進榮以禮隨二語足以想像公之所以為
公者矣而書亦有晉人之遺韻惜乎其名迹不可得而識也夫據誌公嘗除越後城
司以禦蝦夷之衝則公嘗有功德於我州民矣為我州民者雖感公恩德建祠祭祀

可笑豈惟仰公之功德而已乎而所謂越城者其所在今不可考也予將行問博
古君子而謀之也

天保三年八月十九日丹羽惠敬跋

真按源能登守順倭名類聚鈔曰越後國府在頸城郡或曰今頸城郡高田城西
北一里二十町許有國分寺村古國府也蓋今府國讀同是疑此墓誌所謂越城或
曰頸城郡春日下有稱中屋敷者上杉氏之治所而當時亦稱府中見道興准后回國
雜誌然據今高田等地方口碑古國府在高田之東今不可考而寬治三年國圖
載中城者其或此耶未詳孰是姑並書以待後考七年六月廿八日惠又跋

慶雲四年公薨死至今今年千百三十八年矣

桑名君曾刻諸集古十種中雖稍二則稍工矣比之拓本殆不可同日而語也

十五年甲辰十月十四日書

以下全て

白紙

